

『網野善彦を継ぐ』

中沢新一・赤坂憲雄

講談社／2004年
定価 1260円(本体 1200円+税 5%)

ケアフルな一冊

アカデミズムとは……?

坂田三允 (群馬県立精神医療センター看護部長)

歴史学者網野善彦氏が亡くなって半年以上が経過した。私が、網野氏の名前を知ったのは、隆慶一郎の『吉原御免状』だったと思う。それまで私の中で遊郭吉原は、掟にがんじがらめにされた女性にとっての苦しみ場所だという認識しかなかった。しかし、この物語からそうではない一面もあったらしいということがおぼろげに伝わってきた。

もちろん吉原御免状は「お話」であり、史実ではないのだが、荒唐無稽の話とは思えなかった。そして参考文献の中に網野氏の『無縁・公界・楽』を見つけ、公界を苦界と思い込み、苦界＝吉原と単純に考えた。吉原のことが書いてあるに違いないと思って、読んでみようという気になったのだった。

今ではそんな自分が顔から火が出るほどに恥ずかしいのだけれど、本との出会いはそんな勘違いから始まることもしばしばあって、それが思いがけない収穫になる場合が決して少なくはない。ただ、この『無縁・公界・楽』は、古文や漢文が読みこなせない私には、かなり手ごわい本で、理解できたかと聞かれれば、疑問符がたっさんつきそうな1冊ではあった。

しかし、網野氏が庶民の歴史を綴ろうとしているのだということだけはよくわかった。記紀がそうであるように、私たちが知っている歴史は史料として記録され残された、たぶん、主として為政者、権力者の立場で書かれた歴史なのである。

それに対して網野氏は、「人類学や民俗学のような人間の無意識の思考や行為をめぐる学問

と、書かれた史料をもとにして行われる歴史学をひとつに結びつけて、新しい人間の学問をつくりだそうという潮流」に「身を投じて、みずから日本の歴史学に新しい可能性を大胆に切り開いてきたのだった」「『人間が人間に隷属し、支配されるということが、いかなる状況の下でおこりうるのか』といったとんでもないテーマを掲げ、これを実証的に残された文献資料の断片をもとにして語ろうと」したのである。

ところで、網野氏が亡くなったあと、都内の大型書店では軒並みフェアが行なわれたという。しかし、「これだけ人気のある、著作もときには何十万部と売れる、そういう歴史家」であった網野氏は、「歴史学界でもとても人気があると思っている人が多いのですが、それはとんでもない誤解」なのであり、『反網野』のネットワークみたいなのが浮上してくる」ことになるのがアカデミズムの状況だったのである。そのことは一体何を意味するのだろうか。

歴史学者は、網野史学では通史は書けないし教科書も書けないだろうという。歴史学を知らない私はそんなものかと思う。歴史学は歴史学の手法でなければ学問として成立しないのだろうか。史料によって事実を積み上げていくことが歴史学なのかもしれないが、その事実を作り出した人間を抜きにして、本当に私たちの歴史が語れるものなのだろうか。学問とは一体何なのか。そんな思いに浸ったのだった。 ▲

さかた・みよし 2か月に一度この連載を書くのに、四苦八苦しています。ピンとくる本に出会うまで、結構時間がかかって……。でも、一度手にした本は、最後まで読みます。